記憶に残る私の仕事，そしてあの街

思い出深い邸宅の設計

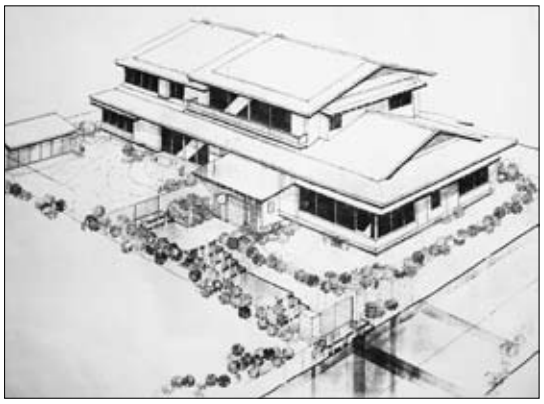
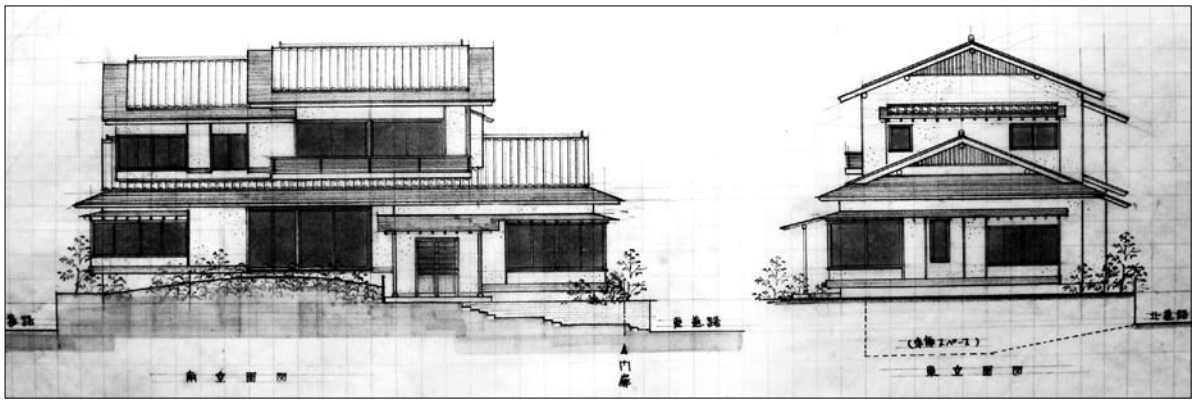
飯泉勝夫

私は建築の仕事として、一貫して木造軸組工法による住宅会社にて、注文住宅の設計に多くを携わってきた。その中で最も思い出の深い住宅がある。それは 1983 年（昭和 58 年）春～夏にかけて設計を行い翌年の春に竣工した。当時、私は住友林業（株）住宅部門、新宿支店の設計責任者であった。施主は著名な芸術家であり、造形の深い方で、都心の一等地に仕事部屋付き住宅を、和風数寄屋造りにて希望された。その住宅は当時の一般住宅に較べ、破格の規模であり単価も高く 10 棟以上に相当し、工事延床面積は地下室を加え 400 ㎡（121 坪）であった。

建設地は準防火地域であり、純和風の外観等には木部を表した仕様ができない部分もあり苦慮した部分もあったが、屋根は切妻、一文字瓦、軒先銅板一文字葺、外壁はリシン掻落し、樋・銅製、ポーチ回りは、屋根・四つ切銅葺、軒天・杉板、垂木・化粧桧小節、柱・杉面皮柱、沓石・自然石、化粧桁・米松ピーラー、床・敷瓦、玄関戸・ヒバ引分け戸とした。また、主和室は桧無垢 12 ㎝角 4 m、天井・秋田杉貼り敷目板貼、二重・回縁、障子・杉（付け子）などとし、水屋も有り、全て純和風の仕様とした。

圧巻は銘木類である、玄関ホールには桧 30 ㎝角の大黒柱、玄関式台、框・主和室の床の間地板、出窓は欅無垢材であり、応接室も大壁和風として、2.6 m・2.6 mコーナー出窓があり、これも厚さ 3 ㎝欅無垢材である。これら銘木類は木場に有る銘木店に施主が出向き見て頂き選定して頂いた。銘木店の店主には採用予定の床柱・地板・カウンターなどの銘木類を分かり易いように並べて展示して置くようにと指示しておき、半日掛けて吟味して頂き、木目も施主の好みにて選定して頂いた。これ程の銘木をこの様に選定したのは今回限りであった。

施工体制はベテランの工事担当者を常駐とした。通常住宅会社では、工事担当者は 10 棟ぐらいの住宅現場を担当し、順回しながら工事管理に当たるので、これは異例の事である。施工店は都内にて、当時では一番の施工店が当たり、腕の立つ名物棟梁が大工職となった。私も工事中に何度も足を運び､施主･工事担当･工事店主･棟梁とも内合わせを行った。また､玄関から見えるホール先と繋がった浴室から見える坪庭では、施主自らスケッチをして、六方石による石組みを現場にて指示して頂き組上げた。



邸宅は見事に完成し施主にも満足して頂いた。私も多くの住宅を手掛けてきたが、施主の財力・立地条件も大事であるが、何よりも、良い物を造りたいとする施主の理解力と熱意である。これにより携わる設計者も工事担当・工事店主・棟梁、その他の職方にも施主の熱意が伝わり、結果としてすばらしい建物ができるのである。この建築に携わり設計者として木造住宅を手掛けた事を満足し良い思い出となった。